3学期終業式資料　　24．.3．15

道のでこぼこを迂回せずに！

～「鈴の鳴る道」（星野富弘）～

校長　小林雅彦

いよいよ平成 ２３年度の大詰めが近づいてきました。おとといの「３年生を送る会」は、２時間があっという間に終わってしまった、という感じでした。生徒会新役員の皆さんの楽しい企画、寸劇、応援、合唱・・・、楽しかった！

１年の校歌合唱。今年の１年生の声には、前進していく勢いが感じられます。難しい混四をよくここまで歌えるようになったものです。

２年の「青葉の歌」、立志式でも歌ってくれましたが、送る会にもピッタリの歌ですね。２年の声は、全員の声がよく溶け合っていて、聴いていてほっとする合唱でした。

そして３年生の歌と応援歌！すごかったね。あの気合の入った声を聴くと、１、２年の皆さんは、まだまだ上があるなあと思ったことでしょう。特に声に気持ちが乗り移った、あの応援の迫力！さらに３年の合唱は、卒業式の練習に参加して思うのですが、厳しい冬の季節を乗り越えて、ハーモニーが一段と澄んできたような気がします。実に味わいのある合唱になりました。明日、最後の響きがこの体育館に残ります。在校生や先生方は、皆さんのハーモニーをしっかりと耳の奥に録音しておきたいと思います。

生徒会役員の皆さん、すばらしい企画を立ててくれて、本当にありがとうございました。

さて、この間の１１日は、東日本大震災からちょうど１年たった日でありました。学校でも半旗を掲げ、全校で黙とうしましたね。この１年間、あの惨状を前にして、私たちにできることはなんだろう、ということを考え続けた１年間でもありました。生徒会が募金や応援メッセージ、栄中での絆音楽会への参加、節電・・・。君たちが考えられる様々なことをやってきてくれましたね。

しかし、最近報道された番組を見ていると、困難に力強く立ち向かおうとしている被災者の皆さんの姿に勇気づけられる半面、原発をどうするのかという問題、流された町をどこに作り直すかという問題、家族や地域を失った方々の悲しみをどう支えていくかという問題など、復興への道のりはまだまだ遠いという実感が湧いてきます。大人も子どもも、これから生きていく上で、３・１１をスルーしていくわけにはいきません。今は何も出来なくても、いつかきっと、若い君たちの力が必要になるときが必ずやってくると思います。その時のために、多少の困難にはへこたれない頭を、体を、心を鍛えておくことが大事だと思います。そういう目で自分を見つめたとき、目先にある壁、つまり自分の思うようにならないことや面倒なことから逃げようとしていることはありませんか。

ところで星野富弘さんのことは、知っていますね。（説明略）彼は、そういう自分の弱さと向き合い、道にあるでこぼこに例えて「鈴の鳴る道」という文を書きました。（昨年も読み合わせましたが）私はこの文の中に、小さな事だけれど、これからの君たちの生き方について、とても大切なヒントがあるように思えるのです。この中に出てくる鈴の音と、１学期に話した「杖うた」はきっと同じだと思います。全員でこれを読んで、平成 23 年度の締めくくりとしましょう。

１年間、私の話をしっかりと受け止めてくれて、ありがとうございました。

鈴 の 鳴 る 道

星野富弘

車椅子に乗るようになってから十二年が過ぎた。その間、道のでこぼこが良いと思ったことは一度もない。ほんとうは曲がりくねった草の生えた土の道の方が好きなのだけれど、脳味噌までひっくり返るような震動には、お手あげである。だいいち、力の弱い私の電動車椅子では止まってしまう。

車椅子に乗ってみて、初めて気がついたのだが、舗装道路でも、いたる所に段があり、平らだと思っていた所でも、横切るのがおっかないくらい傾いていることがある。

ところが、この間から、そういった道のでこぼこを通る時に、一つの楽しみが出てきた。ある人から、小さな鈴をもらい、私はそれを車椅子にぶらさげた。手で振って音を出すことができないから、せめて、いつも見える所にぶらさげて、銀色の美しい鈴が揺れるのを、見ているだけでも良いと思ったからである。

道路を走っていたら、例のごとく、小さなでこぼこがあり、私は電動車椅子のレバーを慎重に動かしながら、そこを通り抜けようとした。その時、車椅子につけた鈴が「チリン」と鳴ったのである。心にしみるような澄んだ音色だった。

「いい音だなあ。」

私はもう一度その音が聞きたくて、引き返してでこぼこの上に乗ってみた。「チリーン」「チリーン」小さいけれど、ほんとうに良い音だった。

その日から、道のでこぼこを通るのが楽しみとなったのである。

長い間、私は道のでこぼこや小石を、なるべく避けて通ってきた。そしていつの間にか、道にそういったものがあると思っただけで、暗い気持ちを持つようになっていた。しかし、小さな鈴が「チリーン」と鳴る、たったそれだけのことが、私の気持ちを、とても和やかにしてくれるようになったのである。

鈴の音を聞きながら、私は思った。

“人も皆、この鈴のようなものを、心の中に授かっているのではないだろうか。”

その鈴は、整えられた平らな道を歩いていたのでは鳴ることがなく、人生のでこぼこ道にさしかかった時、揺れて鳴る鈴である。美しく鳴らしつづけられる人もいるだろうし、閉ざした心の奥に、押さえこんでしまっている人もいるだろう。

私の心の中にも、小さな鈴があると思う 。その鈴が、澄んだ音色で歌い、キラキラと輝くような毎日を送れたらと思う。

私の行く先にある道のでこぼこを、なるべく迂回せずに進もうと思う。

参考資料：「<花の詩画集>鈴の鳴る道」（星野富弘著　偕成社）より